フィールド（現場）からの風 683

宮田守男

白馬を見ると邪気が払える縁起を大切に

2009年11月から書き続けているコラムは17年目を迎えた。一貫したテーマは、地域への問いだ。物事に対する考え方は千差万別、安易な思いつきの発想での取り組みでは効果ある地域づくりができないのではないかとの想いで、さまざまな場面を切り取ってコラムにしている。ぜひ考える機会となってほしいと思っている。

今年の干支は「午」。7日には大阪・住吉神社の白馬神事で、新馬が各本宮を巡拝した後、境内を駆け巡った。年の初めに白馬を見ると邪気が払えると伝えられている。昔・青馬を用いていたが後に白馬を用いるようになったが名称は引き続き白馬を「あおうま」と呼んだとの記録が残されている。新春に白馬を見ると邪気を払い無病息災で新年を過ごせるという縁起にちなみ、白馬連峰の頂を観ることで、ご利益にあやかれると語り継がれる物語になってほしいと願うばかりだ。

今日はいっきゅう（9）の語呂合わせから、とんちで有名な「一休さん」にちなんで、「とんちの日」。とんち（頓智）とは、その場の状況に応じて、とっさに働く機転の利いた知恵を指し、機知や気転とも言い換えられている。「頓智」は「頓知」とも書かれ、どちらも同じ意味を待ち、「智」も「知」も物事を見抜く力や理解する能力を意味するためだ。

一休さんは、室町時代の臨済宗の僧・一休宗純の愛称で、桔梗屋が店の前の橋を一休さんが渡ろうとすると「このはしわたるべからず」と書いてあると伝えると「このはし（端）渡るべからず」と切り返し、橋の真ん中を堂々と渡ったと絵本の童話として読んだ記憶は誰もがあるはずだ。地元に伝わる民話は数多くある、地域にある多くの課題に知恵を巡らし「確執」を「解消」にする頓智に興味を懐く事も地域には必要だ。

元日の中日新聞の信州版に「恵の氷雪・白馬のパウダースノー」の記事に鈴木啓助信州大学名誉教授の降雪への持説が紹介された。この中で「標高が高く、冬は氷点下となる県北部での降雪量の減少傾向はない。日本に寒気を供給するシベリアは冬場に太陽が昇らないため、今後も冷えた空気を日本海に送り続ける。他方、欧州では雪不足が深刻化」との内容に、積雪量への懸念が一時的であってほしいと願ってしまう。

（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）

繁忙期、国道148号線白馬駅前信号機を起因する交通渋滞が松川橋以北まで続く